

## 二組の子どもたち、——アーサー・ランサムと C. S. ルイスの作品から

中 川 和 子

(受付 1997年10月13日)

数年前、大学の公開講座で「比較」というテーマを与えられた時に、専門の英国児童文学の中から、二組の子どもたちが頭に浮かんだ。それは、ヨットに乗ったりキャンプをしたりする子どもたちの姿を写實的に描いて、休暇物語というジャンルを開拓した Arthur Ransome の *Swallows and Amazons Series* (1930~1947) と、ナルニアという別世界での子どもたちの悪との戦いや探究の旅を描いた C. S. Lewis のキリスト教に基くファンタジー・シリーズの *The Chronicles of Narnia* (1950~1956) とに登場する子どもたちであった。出版年代もジャンルも違う作品であるが、男女2人づつの兄弟姉妹（以後きょうだいと表記する）とその仲間が描かれている点が共通している。さらに連想を生み出したのは、双方のきょうだいの持つ類似性であると思われる。即ち、双方の長男は勇気があって誠実な良きリーダーであり、長女はどちらもスーザンという名前であって母親的な役割を勤める。また両シリーズで男女は逆であるが、三番目の子は考え深く、四番目は無邪気で皆に愛される、という配置が共通している。そこで、この二組のきょうだいとその仲間を取り上げて、その共通点と相違点及びどのような子ども像が期待されているかを公開講座で述べた<sup>(注1)</sup>。

その後このテーマについて若干の検討を加えたのでここにまとめておきたい。

よく考えてみると、きょうだいの構成とか同じ名前といった条件以外にも、このジャンルの違うシリーズの登場人物を比較してみたくなったことを正当化する立派な理由が存在する。

その一つは、第1作の発表年代に20年の差があるにもかかわらず、作中年代は<sup>(注2)</sup> 第1作で11年しか離れておらず、第2次世界大戦前と戦争中の違いはあるが、大戦後に大きな社会変化を受ける以前の子どもを描いていることである。

更にもっと大きな理由として次のことが挙げられる。即ち Ransome のシリーズは現実社会での子どもの生活を写實的に描いたとされるにもかかわらず、ただの休暇中の冒険ではなく、Walker 家の子どもたち (*Swallows*) は自分たちを船に乗り組んだ探検隊員だとし、また Blackett 姉妹 (*Amazons*) は自分たちを海賊に見立てて、いずれもその見立てによるゲームを真面目に実行しているのである。この「見立てごっこ」によって、子どもたちの世界は現実と架空の二重構造になっており、そこにファンタジーに通じる雰囲気生まれるのである。その点で、別世界 Narnia での王者としての冒険と現実世界での普通の子どもという Lewis のシリーズと共通する点が存在すると言える。

(注1) 1994年11月9日 広島修道大学公開講座にて口頭発表

(注2) 作中年代推定の根拠は、次の章で述べる。

### (1) 作品に関するデータ

本稿で取り扱う Ransome と Lewis のシリーズについてのデータをまとめておく。作品中で扱わ

れている年代に関しては、Ransome では Peter Hunt が *Approaching Arthur Ransome*<sup>1)</sup> (1992) で推定したものにより、Lewis では Walter Hooper が作成した年表 (*Past Watchful Dragons*<sup>2)</sup> 1979) による。

以後各作品を示す場合、Ransome のシリーズでは発表順に 1~12 の数字で表し、Lewis のシリーズでは同じく発表順に A~G の記号を用いる。(引用は両シリーズとも Puffin 版<sup>3)</sup> により作品番号とページ数を示す)

なお Hunt は作品 12 を、作品 3, 10 と同じファンタジーとして扱っているが、本稿の筆者は 12 には 3 や 10 のように “Based on information supplied by the Swallows and Amazons” という作者名につけた扉の説明が無いことなどから、12 は普通の作品として扱い作中年代は 11 と同じ年と推定しておく。

表 1 Arthur Ransome (b. 1884-d. 1967) のシリーズ作品一覧

|    | 題名                          | 出版   | 作中年代        | 登場人物                        |
|----|-----------------------------|------|-------------|-----------------------------|
| 1  | Swallows and Amazons        | 1930 | 1929年夏休み    | Swallows (略S), Amazons (略A) |
| 2  | Swallowdale                 | 1931 | 1930年夏休み    | S, A                        |
| 3  | Peter Duck                  | 1932 | 子どもたちの創作    | S, A                        |
| 4  | Winter Holiday              | 1933 | 1930-31年冬休み | S, A, D's (略D)              |
| 5  | Coot Club                   | 1934 | 1931年春休み    | D, 現地の子どもたち                 |
| 6  | Pigeon Post                 | 1936 | 1931年夏休み    | S, A, D                     |
| 7  | We Didn't Mean to go to Sea | 1937 | 1931年夏休み    | S                           |
| 8  | Secret Water                | 1939 | 1931年夏休み    | S, A, 現地の子どもたち              |
| 9  | The Big Six                 | 1940 | 1931年秋休み    | D, 現地の子どもたち                 |
| 10 | Missee Lee                  | 1941 | 子どもたちの創作    | S, A                        |
| 11 | The Picts and the Martyrs   | 1943 | 1932年夏休み    | D, A                        |
| 12 | Great Northern?             | 1947 | (1932年夏休み)  | D, S, A                     |

(注) Swallows = John, Susan, Titty and Roger Walker  
 Amazons = Nancy and Peggy Blackett  
 D's = Dorothea and Dick Callum

表 2 C. S. Lewis (b. 1898-d. 1963) のシリーズ作品一覧

|   | 題名                                   | 出版   | 英国暦  | Narnia 暦  | 登場人物                                   |
|---|--------------------------------------|------|------|-----------|--|
| A | The Lion, the Witch and the Wardrobe | 1950 | 1940 | 1000-1015 | Peter, Susan, Edmund and Lucy Pevensie |
| B | Prince Caspian                       | 1951 | 1941 | 2303      | P, S, Ed, L と C 王子                     |
| C | The Voyage of the Dawn Treader       | 1952 | 1942 | 2306-07   | Ed, L, Eustace, C 王子                   |
| D | The Silver Chair                     | 1953 | 1942 | 2356      | Eu, Jill, R 王子, C 王                    |
| E | The Horse and His Boy                | 1954 | 1940 | 1014      | 現地の子と S, Ed, L                         |
| F | The Magician's Nephew                | 1955 | 1900 | 1         | Digory, Polly                          |
| G | The Last Battle                      | 1956 | 1949 | 2555      | Eu, J, T 王 / (後半) S 以外全員               |

(注) 短縮のため ( ) 内の略称を用いる——Pevensie きょうだい = Peter (P), Susan (S), Edmund (Ed) and Lucy (L), 従弟の Eustace Scrubb (Eu), その友 Jill Pole (J), Prince Caspian (C 王子のうち C 王), Prince Rilian (R 王子), King Trilian (T 王)

## (2) 長男 John と Peter

両作家のシリーズでそれぞれ中心となっているきょうだいの長男は、Ransome の John も Lewis の Peter も自分の弟妹だけでなく他の仲間にとっても頼りがいのあるリーダーである。

John は海軍中佐の父からヨットを操る技術や海の男の精神を学び、それを休暇中滞在している湖水地方の湖で<sup>(注1)</sup> (作品 1, 2, 4, 6), 北海 (7) や Norfolk の河口 (8) で実行することに誇りを持ち、やがて父の後を継ぐ日に備えようとしている人物である。真面目で決断力があり、よくきょうだいを統率する。彼のリーダーとしての地位は弟妹にとって当然のこととされ、彼の判断ミスでヨットを沈めてしまった時 (作品 2) でさえ、誰も彼の指図に背かないという幸せな兄として描かれている。彼の競争相手となるのは、同年輩であるが少しだけ年上らしい Nancy Blackett ただ一人である。

作品 6 で年少組が野火にまかれて危険な目にあった時や、作品 7 で意に反して嵐の海へとヨットが流された時のような、自分の力の及ばない非常の際ですら、不安に圧倒されそうになりながらも、彼は全力を尽くしてその危険と戦う勇気があり、遂に難局を打開する力量を持った人物として描かれている。勿論彼も少年 (12才位から15~6才までが扱われている) に過ぎないので、作品 1 でハウスボートにいたずらをしたと、その持ち主から疑われた時や、作品 7 でオランダに入港しなければならなくなって、水先案内人に対して大人の船長が居るふりをした時など、大人を相手に憤慨したり途方に暮れたりする場面もあって、決してスーパーマン的な描かれ方はされていない。少し良い子過ぎる感じもあるがそれも現実味を失わない範囲である。

Lewis の Peter の方も、勇気があって誠実な良いリーダーであるが、シリーズの始めにおいて、兄の権威に反発する 2 才下の弟に反逆される事件が起こる。作品 A の始めでひねくれて狡い態度をとる弟 Edmund にいらだたされ、一方では平生信頼している妹 Lucy が奇妙な話をするのに悩まされている Peter の姿には、権威あるリーダーというよりも平凡な少年という感じがする。ところが、Lucy の話が真実であると知った時すぐに心から妹に謝る率直さを示し、話が進むにつれて、未知の別世界で決断力や危険に対処する能力を十分に示すようになり、その作品の後半では王者たるに相応しくなる。悔い改めた弟からも敬意をもって従われる。次の作品 B でも敵の王と一騎討ちをして勝つ英雄ぶりが描かれる。しかしその作品の前半で未知の森の中を進む際に、道の選択を誤って危険を招く場面があり、作品 A の最後に Narnia 世界で成人した時に

... Peter became a tall and deep-chested man and a great warrior, and he was called King Peter the Magnificent. (A, p. 166)

とあるように、彼は勇気と誠実の人であるが、同じ箇所に

Edmund was a graver and quieter man than Peter, and great in council and judgement. He was called King Edmund the Just. (A, P. 167)

と書かれている弟のような智略の人の役割は与えられていない。

このように両作家とも長男には誠実な良きリーダーの役割を与え、きょうだいだけでなく周囲の者をも立派に指揮させている。しかもこの二人は率直で爽やかな好感のもてる少年というよく似た性格を持っている。本稿で比較する両シリーズのペアの中で役割も性格も一番似た二人である。ただし Peter には年の差が余りない弟が設置されているので兄弟の対立や補完が描かれているが、John の弟は間に二人妹を挟む設定の幼く無邪気な Roger なのでそうした関係は存在しない。

(注1) Ransome の *Swallows and Amazons* シリーズの舞台となっている湖は、鉄道の位置と駅に近い湖岸の波止場から湖の北端と南端の町への定期航路の存在などから、基本的には Windermere 湖をモデルにしているが、北の丘陵と北西の高い山の存在の点では西にある Coniston Water を取り入れていると思われる。

### (3) 長女 Susan

両作家とも長女に Susan という名前を用いた。どちらの Susan も上から二番目で、リーダーである兄を助けてきょうだいを世話するべき立場にいる。

Ransome の Susan Walker (以下 Susan W. と略記) は作品1で初登場する時に11才位と推定されるが、船長役の兄を航海士役で助ける、年齢以上に生活技術に長けた、気分も主婦的な少女である。炊事が上手で、自分たちのキャンプ場所をきちんと整頓しておかなければ気が済まない人物であり、妹や弟に歯磨きとか寝る時間などの生活の規律を守らせるのも彼女の役目である。従って作品中で自分たちの母は勿論 Amazons の母親からも Susan がいれば大丈夫と信用されている。彼女はいつも落ち着いて自分の役目を果たし、作品2で自分たちのヨットが沈没してしまいやっと岸に泳ぎ着いた時でさえ、すぐに火を起し、皆に濡れた服を脱いで水着に着替えるように命令し、その間にお湯を沸かしてお茶を入れるという、全く子どもらしくないほどの分別を持った人物として設定されている。作者は Amazons の叔父が John に向っていう “You’ve got the most sensible mate that ever I saw in a ship.” (2, p. 100) という褒め言葉によって彼女の行為を肯定する。

こうした大人に信用される主婦的な人物であることは、一方では分別くさくて魅力に乏しい登場人物だということにもなる。

彼女にとって親との約束は非常な重さを持っており、それを破ることは耐えがたい苦痛である。作品4に病中の Nancy が提案してきた叔父のハウスボートで夜を明かすというプランを実行したい気持ちと宿で決まった時間に就寝する約束との間で板挟みになって遂に途中から弟たちを連れて宿へ引き返す場面がある。それだけなら読者は良い子にも悩みがあるのだと納得するだろう。しかし Callum 姉弟なら親との約束がないのだからハウスボートに泊まってもよいとなると少々白ける。また作品7で船が流された時の彼女のパニックが、危険に対してよりも、港の外へ出ないという親との約束を破ることに對して起きている箇所では、呆れる読者もいるだろう。もっとも作者は次に、John が強風に逆らって船を港に戻そうと努力すると Susan の船酔いが我慢できないほど激しくなって彼女が初めて涙を流す場面を用意していて、読者はやっと彼女に同情できる。

Susan は母親代理として弟妹のことに常に気を配る。しかしきょうだいたちは彼女のそうした分別くささ、彼らの大人を指す用語で言えば native 風な態度に辟易している面がある。

一方 Lewis の方の Susan Pevensie (以下 Susan P. と略記) は美人でいわゆる女らしい人物に設定されている。最初の作品Aでは彼女は12才で登場するが、世界大戦中に子どもたちだけで疎開している状況なので、妹 Lucy の奇妙な言動を兄と一緒に心配したり、別世界 Narnia に入る時には寒いから洋服筆筒のなかの毛皮のオーバーを借りて着るように皆に勧めたりして、精一杯母親代わりを勤めている。この点は Susan W. と共通した役割である。しかし次の作品Bになると、女らしい心の優しさは変わらないが、自分でも告白するように、こうすべきだと感じて臆病さのせいでそれを行わない人物として描かれ、自分たちを導く Aslan の姿がきょうだいの中で一番最後まで彼女の目には見えない。作品Aの最後の箇所で Narnia 世界で成長した彼女について、 “And Susan grew into a tall and gracious woman with black hair that fell almost to her feet.” (A, p. 166) とあって、多くの国の王たちから求婚され Queen Susan the Gentle と呼ばれていると書かれている。しかしこの美しく優

雅な女王も作品 E では、独裁国の虚勢を張っているが実は愚鈍な王子の求婚に一時的にもせよ心を動かして Narnia 国に危機をもたらすと描かれて、彼女の見かけに反した浅薄さを示している。更に現実世界での成長した Susan は「ナルニアの友」の仲間から脱落して、シリーズ最後の作品 G の後半で新生 Narnia に登場する 7 人の王と女王の中には入っていない。彼女にとって Narnia は子ども時代のおかしなゲームにしか思えなくなっているのである。そのためパーティやおしゃれに夢中で精神世界を忘れ去った軽薄な娘として、きょうだいや以前の仲間たちから嘆かれたり憐れまれたりしている。元来、学者の親を持つきょうだいの中で、ただ一人学問に向いていない子どもとして設定されていた Susan であるが、遂に否定的役割を与えられていたことが示される。

このように、二人の Susan は対照的な性格を与えられている。Susan W. は分別くさくて魅力に乏しい点があっても信頼できる母親代理の人物として設定されており、Susan P. の方は女らしい魅力に富むが世俗の華やかさに惹かれて精神的価値を見失う人物とされている。

Susan W. は 11 才から 14 才位で登場するのであるから、いくら 30 年代の子どもであっても、作中の彼女の考え方や行動は主婦的すぎる感じがする。また妹の Titty のように文学好きでロマンティックな考え方をする子どもに比べると、Susan は確かに面白味に欠けている。しかし彼女が加わっていることで、作中の子どもたちの行動を読者が安心して見守れる面が大きい。そのことが作者に彼女のような人物を設定させた大きな理由ではないかと考えられる。教訓物語の時代ならいざ知らず、20 世紀の児童文学において、風刺的ではなく主役の一人として、こうした大人に受けのよい常識重視の人物を登場させていることが興味深い。

Susan P. の方は Lewis が Narnia シリーズに登場させた主役級の少女の中でもっとも「女らしい」子どもである。Polly も女らしさは十分もっているが、作品 F に登場する彼女は 11 才で思春期前であり、パーティに夢中になるタイプではない。作品 G での馬小屋の中で Aslan の救いを拒む小人たちの例のように、宗教倫理からは Susan のように自ら救いを拒絶する者に救いが拒否されるのは当然であるだろう。Walter Hooper, Clyde Kilby, Robert Houston Smith らの批評家たちもそれを認めている<sup>(注 1)</sup>。しかし優しく華やかだった彼女が Narnia 世界から脱落するのは、読者にとって残念な気がしないでもない。とにかく Lewis は Susan のような意味での「女らしさ」乃至 sex appeal を否定的に扱っている。

(注 1) Walter Hooper, *Past Watchful Dragons* (Fount Paperbacks, London 1980) p. 128.

Clyde S. Kilby, *Images of Salvation in the Fiction of C. S. Lewis* (Harold Shaw, Weaton, Illinois, 1978) p. 58.

Robert Houston Smith, *Patches of Godlight: The Pattern of Thought of C. S. Lewis* (Univ. of Georgia Press, USA 1981) pp. 175-176.

#### (4) Lucy と Titty

次には両方のきょうだいの中の妹を考察する。Lewis は Lucy をきょうだいの一番下の子として、Ransome は上から三番目に Titty を登場させた。(Titty には弟と妹がいるが、一番下の Bridget は作品 8 で仲間入りするまでは赤ちゃんとして別扱いである。) この二人の妹娘はそれぞれの作家にとってお気に入りの人物であるように思われる。

Lucy は他の子どもたちよりも Narnia 世界のイエス・キリストに当たる偉大なライオンの Aslan に対する信仰が強く、Narnia 世界にきょうだいの中で最初に入ったのは彼女であり (作品 A)——このことはその箇所では単に不思議な出来事ではないが、後に作品 D や F で Aslan から呼ばれなければ Narnia には入れないことが説明されるので、Lucy が選ばれた子どもであることが推察さ

れる——Aslanの甦りを目撃し（作品A）年上の子たちがAslanの姿を認めずその指示に従わなかった時、姉妹たちと離れてでもAslanの傍へ赴く（作品B）など、彼女は常に信仰の厚い子として描かれている。

その上Lucyは明朗で心優しく、従弟のひねくれたEustaceを皆が嫌う中で彼女一人優しく庇ってやり（作品C）、その一方で魔法使の屋敷に一人で入って行く勇気を示す（同）のである。Narnia世界で金髪の乙女に成長した彼女は、その地の人々に“Queen Lucy the Valiant”（A, p. 167）と呼ばれて愛され、作品Eでは防衛の軍隊を率いて出動する場面がある。

このようにLucyは顔だちの美しい子ではないが心の非常に美しい子として、いつも肯定的な扱いをされている。しかも作者の視点が彼女に置かれている場面が多い。その点から本論の筆者はかつて作品A～CをLucy三部作として論じた（『*The Chronicles of Narnia*の構成—旅を中心に』<sup>4)</sup>）。勿論Lucyとて良い子としてのみ描かれているのではなく、友達のする噂話を魔法で立ち聞きする好奇心に負けたり（作品C）姉妹のもとを離れて呼集に応じるのが遅れたり（作品B）してAslanから叱責を受ける場面も描かれている。それにしてもLucyが作者のお気に入りであることは疑えない。

一方RansomeはTittyに次のような性格を与えている。即ち彼女は想像力に富み、年齢の割には物語や歴史に詳しくて年上の子たちよりも読書量が多い感じである。お話を作るのを好み、自分たちが創作した水夫Peter Duckを実在するかのようによく扱う（作品2）実際的な他のきょうだいたちとは相当違った性格である。Dorotheaとは物語が好きという点で好み一致するが、Dorotheaのような典型的文学少女ではない。Tittyはまた思い込んだら自分の考えを貫くタイプで、例えば姉妹から見間違いだから止めるようにと言われても、どこまでも泥棒たちの埋めた宝を探し続けて遂に盗まれたCaptain Flintの原稿の入ったトランクを発見する（作品1）。また同じ作品でSwallowsとAmazonsが海戦ごっこをした夜、ただ一人で敵のヨットを奪取するように、彼女は勇敢で実行力がある。そうした想像力と実行力の点で勇敢なリーダーのNancyと通じ合う面をもつが、TittyにはNancyにない精神的な深みがあり、作品6で二股の枝で水を探し当てる神秘性を示したりする。

Lewisが信仰厚いLucyをシリーズ前半で中心に置いたように、RansomeもTittyの視点から描写することが多く、また彼女の心の動きを他の人物以上に描き、作者お気に入りの人物と思える。このように両作家ともLucyとTittyという精神的な力を持つ少女を重視している。

## (5) Nancy

この辺でRansomeのシリーズ一番の人気者であるCaptain NancyことRuth Blackettについて考察しよう。比較がテーマの本論であるが、残念ながらLewisの方にはNancyと比較出来るほど人気のある登場人物はいないようである。

Nancyは作品1で妹が説明するように、海賊ゲームを姉妹二人でやっていて、海賊はruthlessなものだからとRuthという名を自らNancyに変えていると設定されている。男の子顔負けの巧みさでヨットやボートを操り、勝気でさっそうと振る舞い、何事にも見事な実行力を示す。その上想像力に富み、次々と独創的なアイデアを出して、北極探検（作品4）やカンチェンジュンガ登山（作品2）などの見立てによるゲームに皆を参加させ、金鉱探し（作品6）まで企画するという、シリーズ中で湖水地方を舞台とした作品群の原動力になる人物である。

更に海賊ぶって使う‘Shiver my timbers!’や‘Barbecued billygoats’などの口癖でも有名な存在である。その上矢の軸に仕込んだ手紙をオウムに囁ませて発見させること（作品2）や、手旗信号を応

用したシャーロック・ホームズばりの踊る人形の暗号(作品4)なども彼女の考案とされている。

しかしこの怖いものの無いような強気の少女にも二つの弱点がある。一つは母親が大伯母から彼女たちのお行儀について叱られること、もう一つは海にでると船酔いすることである。後者では作品3に Nancy と Titty が激しい船酔いに悩まされる場面がある。湖水上の英雄も海では苦しむのである。(奇妙なことに Ransome は作品7の Susan も加えてシリーズを通して女の子にだけ船酔いさせている。一種の性差別なのだろうか。) 大伯母の方は作品2と11で訪問して来ていて、さすがの Nancy も彼女の前では淑女らしい服装をして言葉遣いに気をつけておとなしくピアノを弾かざるをえない。この Ruth として猫をかぶった Nancy が隙あれば抜け出して平生のキャプテンに戻る痛快な描写がおもしろい。

このような華やかさを与えられているので、Nancy の存在こそ、John と Susan の真面目で堅実一方で少々退屈さえあるのとは対照的であって、シリーズ全体に魅力を与えるのである。しかし不思議なことに、これだけ人気があり、児童文学を代表する登場人物の一人でさえあるこの Nancy がシリーズ中に登場する場合常に Walker きょうだいや Callum 姉弟の目を通して描かれていて、彼女の心の中はほとんど描写されていない。従って読者にとっても彼女は同化するより外から眺める存在である。このことは彼女の痛快さ非凡さに憧れを感じさせる原因となり、彼女の輝かしさを強化する作用があるものと考えられる。

## (6) Dick と Eustace

Pevensie きょうだいの従弟である Eustace Scrubb と考古学者の息子 Dick Callum は、古典語とスポーツを教育の中心とするパブリックスクール乃至その準備教育校で学んでいると思われる両シリーズの子どもたちの中で、それとは異なる「新教育」を受けている子どもである。Eustace の場合は明確に「実験教育校」と名乗るものの生徒である。Dick の学校については明記されていないが、30年代の新しい科学教育を受けていることは間違いない。Ransome の描く Dick は科学に非常に才能のある子どもである。彼の年齢ははっきりと示されていないが、姉 Dorothea が Titty とおなじ位の年齢と思われるので、それより下で Roger よりすこし年上というところであろう。従って30年から31年になる冬休みを舞台とする作品4で、眼鏡をかけたすこし弱そうな少年として初登場した時点で9才か10才位と推測できる。それなのに Dick は同年夏休みが舞台の作品6で、伝書鳩が巣箱に戻るとベルが鳴る装置を考案したり、百科事典などを頼りにして鉱石を融解する炉を設計し、金属を判別する試薬を選ぶなど、年に似合わないほど優秀な能力を示す人物として描かれている。常にポケットに入れているノートに観察や調査の結果を記入して、時に応じてその記入を利用する姿が印象的な科学少年である。一方 Lewis の描く Eustace は Experiment House という新式の教育を提唱する学校の生徒で、両親はいわゆる進歩的生活を実行している。しかしキリスト教と古典教育と伝統的文化を重視する Lewis は、それに反する育ち方をした子どもの Eustace を、口ばかり達者で、機械の写真や昆虫標本をみるのは好きでも、実際のことは何一つ出来ない人物として描いた。利己主義で臆病なくせに弱い者いじめをする困った子どもである。作品Cで Lucy と Edmund にくっついて Narnia 世界に入ってしまった Eustace は、不思議な別世界を旅しながら苦情を言うために英国領事館を探そうとするトンチンカンぶりや、船中の人々が渴きに苦しんでいる時自分だけが苦しいかのように Lucy の割当の水を飲み更に盗み飲みまで企てる身勝手さなど、周囲の人すべてに嫌われる鼻つまみ者として描かれている。こうして周囲の者に大いに役立つ Dick と邪魔にしかならない Eustace という反対の役割が両作家によって与えられている。

二人に共通しているのは、スポーツマン・タイプの子どもたちの中で彼らには体力が余り無いこと、また他人の心中を推し量ることが下手だという点である。しかし似ているのはそこまでである。他人の心が分かりにくいのは、Dickにとっては一度に二つのことに気を配れないほどの熱中型であることと、人間よりも星や動植物・岩石の観察の方に心ひかれるからであるが、Eustaceは単に自己中心的だからである。

その上Dickは見掛けによらず勇敢であって、雪の断崖を伝い歩いて羊を救出したり（作品4）坑道が落盤で埋まった時に進路を探したり（作品6）する際の沉着さは年下のグループの中で抜きん出ている。更に闇の中で凍った湖を姉と二人だけで北の端へと向かう時の勇気は見事である。（作品4）

他方Eustaceは1回目は甚だしい臆病さであり、2回目に登場する作品Dでは真面目に努力しようとしているが、まだ勇敢とはいえない。3回目にやっと勇氣ある戦士に成長している。Narniaシリーズでは回心した子どもは急に良い子になることが多いが、Eustaceは作品Cで回心しても良い子への道を歩み始めるだけであり、徐々に進歩していく過程がその後の作品にえがかれている。その点で、Naomi Lewisが*Twentieth Century Children's Writers*<sup>5)</sup>のC. S. Lewisの項で“... it has weakness (and the improbable Eustace Scrubb is the principle one)...”と書いているのには賛成できない。確かに最初の部分で嫌な子ぶりが少々誇張されてはいるが、決して存在しそうな子どもとはいえない。良い子になっていくにつれて平凡になるのも信じられる。

この二人の子どもの描き方にはRansomeとLewisの新しい教育に対する考え方がよく現れている。Ransomeは科学に信頼を置き、科学教育の長所をDickを通して十分に描いただけでなく、自分の科学的能力を例えば鳩のベルのような作中の詳しい図解によって証明している。一方Lewisは新教育に不信を抱き、Eustaceのような子どもができるのは宗教や古典や想像力を軽視する学校に責任があるとする。

## (7) Dorothea と Jill

両シリーズとも、中心をなすきょうだいは普通の子どもではあるが、物事を巧みにやりこなす有能な人物たちである。従ってそこへ絡んでくる仲間の中に実務に適さないタイプの子どもが混じっていると目立つ。

Ransomeは、野外生活の技術を十分に訓練されているWalkerきょうだいとBlackett姉妹の傍に、その点に関しては都会育ちの普通のレベルかも知れないが、火起こしや魚の調理の経験さえないCallum姉弟を登場させた。それでも弟のDickの方は科学少年で工作能力などに優れているのだが、姉のDorotheaは文学少女で実務能力には乏しい人物である。彼女が作品4で最初に登場した時、新聞紙を使って火を起こそうとしても成功せず、細い小枝で上手に火を起こす他の子どもたちに呆れられる。勿論セイリングの技術など知るはずもない。彼女は何をしても自分の作りかけている物語の続きを考え始めてしまう癖があり、ともすれば現実の事件を物語の言葉に置き換えてしまう。

こうしたいささか現実離れした文学少女であるDorotheaであるが、湖水地方を離れた作品5と9では、その舞台であるNorfolkの子どもたちからセイリング技術を学んだり、探偵チームの組織に自分の能力を発揮したりと中心になって活躍する進歩した姿を見せる。しかしヨットを操れるようになって、キャンプ生活の技術はまだまだSusanたちのレベルに達していなくて困る姿が、再び湖水地方を舞台にした作品11で小屋に隠れ住む場面で描かれている。

こうしたDorotheaと対比するのに絶好の相手がLewisの側ではJill Poleであろう。同じ都会の



知識人の子どもでも Pevensie きょうだいは Narnia 世界にすぐに適応するが、作品 D で初登場する Jill は同級生の Eustace と同様に実際的な生活能力をあまり訓練されていない。しかも 9 才の彼女に課せられるのは冬の荒野の苦しい旅である。それでも気の強い彼女はなんとか負けまいと Eustace 以上に頑張る。落胆したり元気を奮い起こしたりしながら旅を続ける彼女の姿は非常に印象的である。この作品 D は Jill の視点から描かれており、作品中の地の文での Eustace の呼称が Jill の気分によって変化することは以前に本論の筆者が論じたことである（「The Silver Chair 再考」<sup>6)</sup>）片意地な子どもであった彼女は Aslan に会って回心しても、Eustace 同様すぐには素直な子どもになれず、旅の試練を通して徐々に向上してゆき、次の作品 E では立派な Aslan の戦士になっている。本論の筆者にとって Narnia シリーズにでてくる少女たちの中で Jill が一番印象に残る。

作者 Lewis のお気に入り、シリーズ前半の Lucy が Narnia に来るには大きくなりすぎた時点で、Jill に変わったようである。前述した作品 D の次に作品 G でも Jill は活躍するだけでなく、その後半で登場人物が新生 Narnia の奥へと進み、滝を逆上るシーンで一瞬客観描写から Jill の視点になる。これは筋からは必ずしも必要でないので、Jill を強調する効果のためであると思われる。Ransome の方もお気に入りの Titty と共に後半では Dorothea もお気に入りの人物のようであって、彼女が中心になる作品が多くなる。(5, 9, 11) 両作家とも状況に不慣れな少女が次第に練達の域へと進歩向上してゆく姿を取り扱っている。

#### (8) 子どものあるべき姿

以上述べてきたように両シリーズには対比するのに適した登場人物が多い。二つのグループそれもきょうだい中心のグループを比べれば似たタイプの人物が含まれても不思議はないかも知れない。しかしこの場合はそれ以上の確率で対比される。それは両作家が子どものあるべき姿と考えるものの共通点が大きいためだと考えられる。

まず子どもたちは両シリーズどちらでも、家庭を離れているので、自分たちで考え判断し、自分たちの力で問題を処理すべき立場に置かれている。従って彼らのあるべき姿として、第 1 に自分で考える力と実際に問題を解決できる力を持つことが要求される。口先だけの理屈や紙の上の知識だけでは駄目なのである。第 2 に困難を克服する勇気と忍耐が要求される。Ransome では特に作品 6 の野原の火事の時や 7 での自分たちだけでの北海横断の時にそれが現れる。Lewis ではシリーズ全体がそうした試練の旅の物語である。第 3 には集団で行動するので、年長者がリーダーとなって年下の者を助け導き、年少者たちはその指導を受け入れるという協力体制がとれることが要求される。それには当然家族の絆を重んじ、兄弟を尊敬することも含まれる。第 4 のそして最も重要なことに、子どもたちには従うべき掟が存在しそれを守ることが要求される。

Lewis の場合は宗教的な問題をテーマとしているので、作中の救世主である偉大なライオン Aslan の教えに従うこと即ちキリスト教徒としての信仰が最も重要なこととして子どもたちに要求される。彼らはどんなに苦しくとも自分に課せられた使命を果たさなければならない。

一方自由に休暇を楽しんでいるように見える Ransome の子どもたちにも守るべき掟が存在する。Walker 家のきょうだいにとって親との約束を守ることが大きな拘束力となっている。自分たちのしたいことを変えてでも親との約束を守ろうとしている。その上このシリーズの子どもたちは、本論の始めでも述べたように、ただヨットに乗ったりキャンプをしたりするだけではなく、船の契約した乗組員とか海賊とかの自分たちで定めた役割に従いながら、探検ごっこ、登山ごっこ、船合戦といった見立てゲームを行っているのである。この場合都合が悪いからといって一度決定したルール

を変えることはしない。こうした約束を守ることとフェアプレイの精神がこのシリーズを貫いている。

以上のように、与えられたものでも、自分たちが定めたものでも、従うべき掟を守って一生懸命に努力する点に両シリーズの核がある。こうして両作家が描いた子どものあるべき姿には共通点が多いのである。ただ相違するのは、いわゆる「女らしい」魅力を否定的に描く Lewis に対してそのような魅力を扱わない Ransome という点、もう一つは新しい科学教育を肯定する Ransome に対して宗教と伝統的教育を重視する Lewis という点である。ここで付け加えておきたいのは、子どもたちがあるべき姿をとれるように、周囲で見守り、必要に応じて援助の手を差し延べる大人たちの存在である。両シリーズともそのような家族や社会の善意を描いている。

Ransome では作品1の最後で嵐の翌朝に湖畔のあちらこちらから、母親たちや関係のある大人たちが島のキャンプへと子どもたちの様子を見にくる場面とか、作品4で Callum 姉弟の泊まっている農家の無口な主人が Dick に手を貸して氷の上を帆走する櫓を作る場面などに大人たちの子どもへの関心と善意が表れている。

Lewis のシリーズでも、Peter と Susan に助言する老教授（作品A）、Narnia 世界で Pevensie きょうだいの案内役兼保護者の役を勤める Beaver 夫妻(同)、Eustace と Jill を案内する Puddleglum（作品D）などがその良い例であるが、何物にもまして子どもたちを保護し導くのは救世主であるライオンの Aslan である。

### (9) 子どもを扱う方法の相違点

前述のように、子どものあるべき姿に関して両作家は大体一致している。しかし両シリーズで子どもを扱う方法には、ジャンルの違いから生じるものも含めて、二つの相違点が存在する。それは悪い子（むしろ歪められた子）の問題と成長特に思春期の問題の扱い方である。

Ransome のシリーズには悪い子は登場しないし、子どもたちはしかたなく約束を守れなかった場合以外にはモラル面で過ちを犯すこともない。Nancy はわざとのお行儀の悪い言葉を使ったりするが、それは海賊の役を演じているからであり、行動面では大伯母の目をかすめる以上の問題は起こさない。作中の悪人は作品1の泥棒や作品9で子どもたちに疑いをかけようとボートを流して回る青年などであって、決して子どもではない。Ransome の子どもたちは当然の事として不道徳から守られている。

一方 Lewis のシリーズは誤った道に入り込んだ子どもを正しい道に戻すというテーマを持っている。従って作品Aでは Edmund, Cでは Eustace, Dでは Jill, Eでは Narnia 世界の子 Shasta と Alavis, Fでは Digory がそれぞれ自分の過ちや不信仰に気付かされ、悔い改めて Aslan の教えに従うという「回心」を経験する。それ以外にも、子どもたちの信仰が足りなかったり小さな過ちを犯したりした時に、Aslan から叱責を受ける。

このように同じような子どもを描いても、現実世界でゲームをしている Ransome の子どもは、良き時代を反映する道徳教育や周囲の大人の善意に守られて自然に大きな過ちからは遠ざけられ、一寸した間違いをお互いに謝るだけですむ。一方、学校や家庭の教育の歪みを正し、キリスト教の信仰を子どもたちに伝えるというメッセージをもったファンタジーの中の Lewis の子どもは明確に悔い改めの形で描かれていることが必要なのである。

第2の成長の問題は児童文学が本質的に抱えている問題である。即ち純真な子どもという樂園に閉じこもるか、成長して思春期を迎えるという現実と取組むかの作家の態度の問題である。

Ransome は1929年から1932年までの丸3年間の物語を書いた。それ故作品1に13才位で登場した最年長の Nancy は作品11では16才になり、赤ちゃんだった Walker 家の末子は作品8では5~6才即ち作品1での Roger に近い年齢になっている。年齢の変化と共に作者は子どもたちにどのような変化を与えたか。まず Walker 家のきょうだい特に年長の二人は作品7で北海を横切って以来、今までのゲームの世界を脱却し始めている。即ち作品8で新たに知り合ったグループと一緒に Nancy が生贄ごっこをやりだすのを、John と Susan は迷惑視し父から与えられた地図作製に専念しようとする。Nancy は更に今まで通りに船合戦をやりたがる。Nancy がゲームの世界に固執するのに対して John と Susan は大人に近づこうとしているのである。ただしその他の点では変化は目立たない。男女の気持ちといったハイ・ティーンの世界は出現しない。30年代の子どもは現在より性の目覚めは遅いではあるだろうが、いつまでも子供っぽすぎると批判したくなる。要するに生活の責任をとるといふ面では成長が描かれているが、思春期の男女という面での成長は全然取り上げられていないのである。

一方 Lewis は年長の子どもを次々に Narnia 世界から排除するという形で成長の問題に対処した。初登場の時13才の Peter と一つ歳下の Susan であるが二人は翌年を舞台とした作品 B の終わりで Aslan からもう二度と Narnia には来られないと宣言される。作品 A で10才の Edmund と9才の Lucy は翌々年を描いた作品 C の最後で同様の宣言をされる。この後の彼らはシリーズに登場しても、作品 E で Narnia 世界での成長した姿 (Narnia 暦で14年後) を見せるのは実は作品 A での Narnia 滞在期間の一部に当たる時期なのであり、作品 G では現実世界で9年経過して後に現れる、というように二度と子どもとしては登場しない。しかも成長した彼らはもはや作品の中心人物ではない。作品 E での彼らは、中心人物である Narnia 世界の子どもたちの活躍の背景の役割に過ぎない。また作品 G では新生 Narnia に今までシリーズに登場した者全員 (Susan を除いて) が揃う箇所に現れるのである。要するに12才か13才が Narnia 世界の冒険を楽しめる限度となっている。従って成長はファンタジーの世界から離れて現実世界に密着することを意味している。しかしもう Narnia 世界に入れれないということはその世界を忘れるべきだということではない。むしろその反対に心の中ではいつまでもその世界との接触を保つべきなのである。それ故に作品 F (英国暦1900年) で Narnia 世界の誕生を経験した Digory と Polly が最終作で60代となっても Narnia の友であり続け新生 Narnia の7人の王と女王に入ることができ、世俗の華やかさに幻惑された Susan だけは脱落するのである。このように現実世界で成長しても精神世界では子どもの純真さを保てば、大人らし過ぎず子どもらし過ぎもしない、しかもそのどちらとも思えるような存在であり続けられる。[作品 D の最後近くで老 Caspian 王が甦った場面で Jill は彼が a young man なのか a boy なのか判断しかねる。そして作者が

Even in this world, of course, it is stupidest children who are most childish and the stupidest grown-ups who are most grown-up. (D, pp. 203~204)

と説明することを参照してほしい。] このように成長拒否ではなくて永遠の子ども性を持ち続けることができるのである。ただ見逃してはならないのは、その永遠の子ども性の保持がシリーズの登場人物に与えられるのは、現実世界では事故で死に新生 Narnia に甦ってからのことだという点である。

以上述べたように、結局両作家はどちらも作中の子どもたちを思春期の男女としての問題に触れ

させることはしなかった。もちろん両作家の時代は現代の児童文学のように性の問題を扱うことはなかった。しかし性でなく一般的な成長は扱うことが可能である。けれども Ransome は成長の問題をほとんど無視して明朗で爽やかな子ども時代だけを扱っており、Lewis はファンタジーの世界に象徴される精神問題として取り扱った。そこに両作家の違いがある。

### (10) 結 び

(8) (9) でまとめたように、Ransome と Lewis の二人の作家が描く子どもたちは、ジャンルの違い、両作家の個性による違いはあっても、よく似た印象を読む者に与える。彼らはきょうだいを中心にしたグループとなって助け合うことによって、大人の力から独立して（当然陰での大人の支えはあるわけだが）種々の問題に取組みそれを克服してゆく。そこには、宗教乃至道徳律を重んじ、きょうだいや友達との信頼に基づき、約束を守りフェアプレイの精神に乗っ取って一生懸命に努力し、それぞれの才能や性質を生かして与えられた役割を果たしていく子どもたちの姿がある。これこそ児童文学の全盛期に相応しい明るさに満ちた世界である。現在から見れば古き良き時代の子どもであって、現実社会の暗さを反映していないとも言えるかも知れない。それでもこの二つのシリーズに描かれた子どもたちは何時の時代にも望ましい存在であり、忘れられない魅力を持っている。

### 引用文献

- 1) Peter Hunt, "Approaching Arthur Ransome" Jonathan Cape 1992 pp. 72-83
- 2) Walter Hooper, "Past Watchful Dragons" Fount Paperbacks 1980 (First Published in the USA by Macmillan 1979) pp. 50-51
- 3) Arthur Ransome, "Swallows and Amazons" Series, (First published by Jonathan Cape 1930-1947) Published in Puffin Books 1962-1971  
C. S. Lewis, "The Chronicles of Narnia" (First five books published by Geoffrey Bles 1950-1954 and two later books published by The Bodley Head 1955-1956) Published in Puffin Books 1959-1964
- 4) 中川和子「The Chronicles of Narnia の構成——旅を中心に」Part I 『広島修大論集』25巻2号 1984, Part II 『広島修大論集』26巻2号 1985
- 5) Naomi Lewis, 'C. S. Lewis' in "Twentieth Century Children's Writers" Macmillan 1978
- 6) 中川和子「The Silver Chair 再考」『広島修大論集』32巻1号 1991